

神、いよよ遙けく、
晋ねく、冷厳なるもの

北 澤 義 弘

一九九一年のアラビヤ半島の戦乱、所謂湾岸戦争をテーマにしたカラー写真集（戦火の四都市、写真広河隆一、解説板垣雄三、他、第三書館、一九九二）を今繰っている。イラク、クウェート、サウジ、イスラエルの町々、砂漠、油田、湾岸地帯の科学戦の爪跡の何たる酷らしさ。その内容は地獄圖繪である。

いかめしき戦車の蓋を押しあげて

女兵士が顔出すところ

石の家崩しおゝせし装甲車

落ち来る石に潰さるところ

数百の人が死にたる防空壕

爆裂弾に穴明きしところ

砲火浴び廣き砂漠に累々と

駱駝の死骸轉がるところ

赤き火に一人ぼっちの眞裸の
女亡者の泣きいるところ

家財家具負ひたるまゝで牛頭馬頭に
瓦礫の道を追はるゝところ

いろいろの色の鬼共集りて
爆撃戦果指し笑むところ

同胞が皆殺されし所にて
面覆被き祈れる女

暗黒の眞昼の砂漠數條の
紅蓮の火柱ゆれいるところ

タール浴び岩礁に立つ鵜の哀れ
油除^のけんと羽振るところ

浄玻璃に歴然たるや機銃にて
弱き人らを狙ひ撃つところ

倒れたる戦車の上の白ペンキ

PUMPKIN, Hussain と書きたるところ

数々の寫眞には以上の様な画題が付けられよう。写真でもこれ程である。現場は直視にたえぬ姿に違ひあるまい。

しかしこれはこの世に珍しい情景では決してないし、人類史を遡ればむしろ人間の繰り返してきた姿を示している。

であるからこそ人間のなす社会的でも個人的でもあるこの現象に應えてくれる文学があつて然るべし。私の文学趣味は時を超越して人間の共通話題を歌ったミルトンの「失樂園」を思ひ出させる。さきの「赤光」本歌取りを「失樂園」本歌取りに切り換えてもやはり全く同じ歌が當てはまるだらう。

ジョン・ミルトンの叙事詩への意向

ミルトン（一六〇八―一七四四）の畢生の作、バラダイス・ロスト *Paradise Lost*（一六五八―一六三三）は大敘事詩である。十七世紀と云う詩と宗教の伝統的イメーじのすたれゆく時代にあえてミルトンが英雄詩型 *heroic verse* をもって挑んだ所に彼の高邁で雄大な心意が見られる。敘事詩は美德を扱ひ、主人公は最後に成功することになっている。ではこの詩の主人公アダムは樂園を追はれて成功なのかと疑問がわく。その答にはミルトンの清教徒的立場と当時の彼の「離婚論」を考えなければならぬ。こゝでそれを論考する意図はない。たゞ樂園は時空を超越した神に「囲はれた庭」であり、アダムとイヴは「樂園脱出」を果たした聖なる喜劇と考えることができる。

こゝでは無智蒙昧なアダムを唆かすサタンが人智に溢れたフル役を見事にこなしている。それが詩劇のリーディング・モウティブとなっている。彼の智慧は人間理性のあらゆる可能性を網羅している所が痛快と言えは不遜に過ぎようか。そして神は火の剣をもってアダムとイヴを樂園から追い落すのである。そもそもミルトンの敘事詩への意図は一六三八年のイタリア旅行が契機となっている。外国旅行の數多い体験が詩人のイギリスへの祖国愛とギリシャ、ローマの先人ホームー、ダンテへの関

心を抱かせた。彼らは何れも自国の歴史と国語への愛情を示していることに刺激を受け、ミルトン自身も自国の歴史と言語を基に敘事詩のテーマを探していた。そしてスペンサーのフェアリー・クイーン *The Faerie Queene* のあとを継ぎ、アーサー王伝説を心掛けていたことは一六四二年のエッセイ「教会統治の理由」にも示されていた。しかしやがてスチュアート王朝の意向に反しアーサー王伝説の史学上の曖昧性が判明してきたことから、彼の潔癖性がこの主題を拒けることになったと考えられる。科学的合理性は詩人自身ばかりでなく十七世紀の時代精神でもあった。バジル・ウィレーの言う「科学時代に於ける英雄詩」こそミルトンの究求する目的に叶うものであった。また聖書の創世紀は当時その史実性に疑問はもたれていなかったのである。さらにイタリア旅行でかき立てられた祖国への愛国心は急遽の帰国にも抱らず母国の泥沼的な政変と宗教の相剋を見せつけられる始末であった。自国への自信喪失は彼を人類誕生からの根源的反省に向はせたと考えられている。こゝに「失樂園」が普遍性と超時代性を得た理由が存在する。

サタンの近代性

文学趣味は居丈高な議論を好まない。この随筆はなかなか近寄り難いミルトンの「失樂園」の中を垣間見た時に得た極めて現代的な印象を綴ろうとしたものである。

この詩は一六六七年に十巻本として刊行されたが、七四年には十二巻の現在の形として再版された。

これは「神に対する人間の最初の叛逆と、またあの禁断の木の実について、おゝ、天にまします詩の神よ、これを歌ひ給え、」で厳かに幕を開ける。物語りは四部に大別されよう。第一は神に逆って地獄に落され、復讐を誓う大逆天使の様子と、神の創造物である人間への誘惑について画策する所、次は地上の樂園で平和に暮すアダムとイヴに神が天使ラファエルを遣し、サタンに対する注意を喚起する所、第三は蛇に乗り移ったサタンがイヴをだまして林檎を喰べさせ、アダムはそれを知って自らもそれを喰べ樂園から落ちる決心をする所、最後はアダムがイヴと手を取り合って樂園を出てゆく所である。神は人間の不従順に怒り、人間の未來を予言して、冒頭に一人の偉大な人をその救ひのために派遣することを暗示するのである。

第一巻で先ず現れるのがあの蛇、淨き天から真つ逆様に凄じい勢いで炎々たる焰に包まれ、地獄に落ちてきて横たはっている大逆天使の姿である。しかし更なる神の怒りを受け、暗黒の世界での拷問を受けているにもかかわらず彼はなおも神への不敵な復讐の念に駆られている。神とこのサタンの戦ひの描写はとて三百年前のものとは思えないどころか、現代の科学戦そのものである。

文中から神とサタンの戦況を引用してみよう。先ず神が原子爆弾か殺人光線並みの非道な武力を使用する。

なんと高い高い天空から、なん（Ⅰ・九二）

という奈落の底に

墜ちたことか！雷霆を彼は用いた―だから

、彼の力がわれわれの

力以上に強力だったのだ。それにしても、

あの恐るべき

武器の威力を、その場に臨むまで知らな

つたとは！

ジョヴならば当然雷神であるからそれを使う筈である。しかしジョヴは異教神であるから、サタンならともかく神が異教神の武器を使うとは解せぬ話ではある。またここでサタンは神の唯一人による覇權に憤慨しているが、それはミルトン自身の心情でもある。作者のキリスト教會への疑問が―神ではない―吐露されているとも考えられる。するとサタンはミルトンの代辨者と見られてもよいであらう。然し話を先へ進める。神のサタンへの次の仕打ちは今のシチリヤ島の東北のメッシナ海峡にあるファロ岬のことに譬えた話になっている。

見よ、彼は忽然として湖の面からその（Ⅰ・二二〇）

強大な体躯を

持ち上げる……。焰が、さっと左右に

分かれて後方に押しやられ、

めらめらと燃えるその尖端を靡かせ大きく

波うつ、かと思うと、

次の瞬間、そのあとの真中に、焰の谷間

が生ずる。あつという間に、

彼は両翼を拡げ、未だかつて感じたこと

もない異様な重さを

感じたに違いない、暗澹たる大氣を押し

ながら、颯爽として

翔けてゆく。やがて、陸地に降り立つ―

ただし、液状の

焰をあげて燃えている湖と同じく、固い

焰をあげて燃えている

土地を、もしも陸地といえるならばの話

だ。事実またその様相は、

たとえば地下の風の圧力がペロルス岬の

一角から山を吹き

飛ばし、或は、轟々たる地響をたてて

いるエトナの山腹を

粉微塵に吹き飛ばすときの様相さながら

であった。こういった

場所では、内部の物質はそれ自体燃えやすいために、少しでも

風に煽^{あお}られるや否や、忽ち火を吹き、さらに地下の鉱物のもの

猛烈な熱気によって容易に気化され、風の猛威をいっそう

強める結果になる。そしてそのあとには、

悪臭と噴煙の立ち籠める、

無残にも焼け爛^{ただ}れた地底が残るだけなの

だ。このような休息の場所に、

サタンの呪はれた足が辿^{たど}りついたという

わけだ。続いて、腹心の

仲間も降り立ったが、両者は、天使で

あるからには地獄の池から

脱出したのも当然だ、蘇った自分の力

でそうしたのだ、と得意に

なっていたが、実は至高^{いたがもの}者の御許しに

よるとは思ってもみなかった。

この最初の行でサタンが湖面から脱出する時の「身体にぐっと重力を感じる」feel unusual weight 描写法は実に物理学的な言い廻しと言えよう。また「燃える湖面、固い焰の地面」などはヴァイタリズム即ち異教的興

奮を催させられる。最近の湾岸での臨戦感にも似ていないだらうか。

：。円蓋^{えんがい}のようにただ火、火、火で（Ⅰ・二九六）

掩はれた焦熱の世界が、これでもかとい

わんばかりに、彼の体を

苛^{さい}んだ。にもかかわらず、彼はそれに堪

えに堪え、ついに、

焰をあげて燃えている火の海の岸边に辿

りつき、すつくと

立ちはだかり、依然として天使を姿を保っ

ている麾下の軍勢に、

大声で呼びかけた。虚脱したものものよ

うに、累々と横たわっている

彼らの様子は、亭々と聳えるエトルリア

の森がこんもりと

樹影をおとすあたり、ヴァロムブローサ

の流れに散りしく

秋の枯葉、さながらであった。それとも、

——かつてエジプトの王

プシリスとそのメン・フィスの軍勢が（筆者改訳）、約

束^{むく}に背

き、憎悪にかられて、

ゴセンに住んでいたイスラエル人^{びと}を追跡し、結局紅海の怒濤に

吞まれてしまい、その漂う死骸と破壊された戦車の残骸を、

安全に対岸に辿りついていたイスラエル

人が眺めたことがあったが、

その紅海の岸辺を荒れ狂う疾風^{はやて}を武器と

してオリオンが襲ったとき、

その一帯に散乱し流れ漂った菅^{すげ}の葉の

ようであった、とてもいおうか。

意気沮喪した敗残の天使たちが、火の海

を蔽うて幾重にも

重なり合い、横たわっている姿はまさし

くそのようであった。

サタンの軍勢が彼即ち神の軍の前に一たまりもなく追
い落された無残な情態の描出である。W・ブレイクの絵
にでもありそうだ。この人類が出現以来今に至るまで少
しも変らぬ行動をサタンを役者として演出させている。

この失樂園はやはり宗教の書ではなく、文芸であり、人
類の仮借なき写真である。であるからサタンと神のこの
攻防に強い感動の迫力を覚えるのだ。火の海辺にたどり

着いてすぐと立ち上がった翼をもつサタンは第四巻で

「姿は鵜 Cormorant の様だ」と書いてある。ヴァロム
ブローサはフィレンツェの近くの溪谷で、ミルトンがそ
この修道院に宿泊したこともある紅葉の名所である。そ
の落葉は勿論河床に横たはる累々たる死体を象徴してい
る。プシリスはエジプト王のことであり、こゝはユダヤ
の民がエジプト軍に追はれてシナイ半島に逃げた所を借
りた説明である。戦車と屍の遺捨の情景は歴史の隔りを
全く感じさせない。こゝにあるオリオンは星座を指し、
嵐の前触れを意味している。戦いばかりでなく、このサ
タンの智慧は科学、産業の実利の追求にのみ能力を費す
人間の地球破壊にまで及ぶ横暴にも意味深い暗示を与え
ている。長い引用となるが、くどい解説よりはその方が一
目瞭然でもあり楽しくもあらう。

そこから余り遠くない所に山が聳^{そび}えて（I・六七〇）

いたが、その不気味な

頂きからは、火と濛々たる黒煙^{もくもく}が上がり、

渦を巻いていた。

他の部分は尽くきらきらと目も眩むよう
な鱗状の地衣に

覆われていたが、これは疑いもなく、胎

内深く、硫黄の造り出す

原鉦が隠されている証據であつた。忽ち、大勢の部隊が

まっしぐらに空を翔けてそこへ急行した。

その様子は、

戦野に塹壕を掘り堡壘を築くために、鋤や鶴嘴をもった

先発工作隊が本営より前に先行するのに似ていた。指揮者は

マンモン——そうだ、天から墜ちた天使のうちこれほどさもない

根性の持主もなかったという、あのマンモンであつた。天国に

いた時でさえ、彼は常にその眼と心を下に向け、都大路に

敷きつめられた財宝、つまり足下に踏みつけられた黄金を、

神に見えろ際に切々と胸に迫るいかなる聖なる祝福よりも

遙かに讚美していた。のちになって、人間までが地球に対する

掠奪を始め、その冒瀆無残な手をもって母なる大地の

臟腑を探り、本来そのまま秘められてい

てこそ然るべきであつた。

数々の宝を奪取するにいたつたのも、もとはといえば、

このマンモンの示唆によって大いに教えられたからに

他ならなかったのだ。まもなく、彼の率いる一隊は、

山腹を穿つてそこに大きな傷口を切り開き、続々と

金塊を掘りだした。地獄に財宝が生じていることを異とする

人があれば、それは間違っている。地獄の土壌であればこそ、

こういう貴重な有毒物を生ずるのにふさわしいからだ。

.....

ところで、すぐ近くの平地に

多数の穴が設けられ、その穴の下には、火の海から溝を通じて

燃える水脈が引かれた。第二の軍勢は、早速この穴の中で

驚くべき技術を駆使して膨大な金の原鉦を熔かし、選別し、

鉦滓を掬いとった。第三の軍勢も、これに遅れてなるものかと、

地面に多種多様な鑄型を掘り、その空洞の一つ一つに

不思議な技法で潑りたつ穴から熔けた金を流し込んだ。

それは、オルガンでいえば、一塊の空気を一方から

受けて、伝響板がそれを無数の管に送って音を吹き

鳴らすのに似ていた。と思うまもなく、流麗な

交響楽の調べと甘美な歌声につれて、神殿風に造られた

宏壮な建物が、地中から忽然として霧のように浮かび上がった。

人類は有史以前から地に穴を掘り、鉱物資源を掘り出す知恵は持っていた。ゴリラには決して出来ない。またそれを原料として金属や火薬、燃料、食品、装飾品その他多種多様なものを創造して来た。それはいつの間にか必要の限度を超え工業、産業上乱獲乱脈に堕しはじめ、原文によれば、

Men also, and by his suggestion taught,
Ransacked the centre, and with impious
hands

Rifted the bowels of their mother earth
For treasures better hid. I, 685

と自然の恵みへの憤みもなく、母の臓腑を手で引掻きまはしている。十七世紀にしてこの有様である。然しこゝに出るマンモン Mamon はアラム語の富、財、金の意で、聖書では大文字で擬人化し、第九位最下位のさもしい天使を表していることからみれば、人類は古來余分の財貨は蔑んでいたことが伺える。

神とサタンの原罪をめぐる戦いのシーンは実に近代戦らしい凄じい描写であり、人の地球への處し方についても二十世紀末の現代人には手痛い批判となっている。それは三百年の時間の隔りを持つにも拘らず理知的な判断に基いているからである。ミルトンは王政復古後にできた「英国学士院」の影響は受けていなかったが、根っからの新教徒であり、その立場から凡そ眞実でないものは道徳的に排除したのである。も早や伝統的詩の虚構に基く表現には関心はなく、眞実への情熱が彼の敘事詩に向う力となった。以前の「アーサー王伝説」への意図は消え去り、残るのは聖書だけであった。しかもその聖書をも自分の目的に叶うよう意味付けを行っている。サタン

は神を「彼」と呼び神への批判は手厳しい。当時の刻々に明らかにあってゆく科学の発見は眞実への彼の情熱を刺激した。

ミルトンの新しい宇宙

コペルニックスやガリレイ、ケプラー等の地動説による宇宙構造論を彼は深く理解していた。天道説を唱え、宗教裁判で蟄居させられている失明の科学者ガリレイをフイレンツェ近くの修道院に訪ねたミルトンは望遠鏡による宇宙の新発見に大いに共鳴し、一方宗教や政治権力による自由の束縛に敢然立向う決心をした話がよく知られている。彼は自らの失明前にイギリスで望遠鏡の天体観測をしていたことは確かである。それは「失樂園」の中に多く記述されている。ガリレイのことさえ一卷、二八七行目に「あのトスカナの技師が望遠鏡で」という句を月を観察する場面に記している。また太陽の黒点をサタンに譬える所も第三巻にあり、天使が天から地球を眺めている風景も五巻の中に述べてある。月も地球も自らは発光していないこと、木星の四個の衛星、金星の満ち欠け、土星の環、太陽中心説、地球公転論等新天文学の基本的なことは大低明らかであったし、ミルトンも充分理解はしていた。そこでミルトンは聖書解釋の都合上地球は動かぬこととした上で、プトレミー Ptolemy の天動説を借用しながらも科学上、道義上の矛盾を次の様に

表現しているのは興味深いことである。

……大地よ、地上の天よ、お前の周りに（Ⅹ・一〇三）
は光り輝く

もろもろの天体が踊っている、光また光
とその燦然たる燈火を

掲げている、しかも、わたしの見たところ、

そうやってお前にのみ

仕え、聖なる影響力にみちた高貴な光線

をひたすらお前にそそいで

いる！ 天にあっては神が中心であり、

しかも一切に力を

及ぼしているように、ここではお前が中心でありこれらすべての

天体から光を受けている。……

サタンが地球に忍び込み、智天使の目を盗んでチグリス河のほとりに来る。生命の樹のあたりで、蛇の姿となり吐く言葉である。大地は人のもの、その人の世界にもろもろの天体が燈火を掲げて仕えている。天上では神が中心となり支配している如く、地では人間が中心となりすべての光を受けている。まさに人間中心の世界観である。サタンはこの事実を認めている。この意味ではサタ

ンは人間のよき理解者であり、^{アダム}人は禁断の林檍を通して智慧を得るのである。この敘事詩の完成後二十年目にイギリス人、ニュートンは林檍のお蔭で万有引力を発見し近代は足音高く科学と理知を掲げて前進する。

ミルトンは聖書と新天体論の食い違ひを補正するため敢えて天道説を取ったことにより、キリスト教義とギリシャの人間至上主義を同時に調和させてしまった^{わざ}は見事と言える。この場面では何れか一方が動いていさえすればよいので無用な摩擦は避けていると思はれる。

二世紀から十六世紀までの天地の論理はプロトレミー説であり、人も教会もそれを信じきっていた。大地は不動であり、それを廻って九枚の透明な天の板がそれぞれ固有の惑星を嵌めて回轉している。恒星は最も外側の原動天に付いている。ピタゴラスの説では更にそのそれぞれ^の面が時を違えて動くので「天の音楽」the music of the spheres を奏^{かな}つと云うはなほ浪漫的な学説である。それが詩的心象を詩人に与えるのだ。シェクスピアの作品にもこの天の音楽は数多く見られる。従って彼の方が同じルネッサンス文学でもミルトンよりも旧型の方に属する。勿論コペルニクスの地動説は一五四三年に De revolutionibus orbium coelestium として上梓されていた。シェクスピアもそれは知っていたのでそれに基く敘述もあるが、ミルトンの様に明確な地動説宇宙

論は説いていない。ミルトンは思想上当時の新科学諸説に全く共鳴しておりこの敘事詩にもそれ等が文学的、宗教的配慮を加えた上で援用されていることは既に見て来た通りである。また第十二章五一五行では、神と世俗の地位・稱号を結びつけ人の自由を束縛するような習慣、禁断の木の実なる神の掟に対しサタンを通して大いに抗議するのを懼れないなど流石に近代の黎明を思はせる。ミルトンの神学的宇宙の図は詩の第一卷七三行に明瞭に説明されている。

ここは神の在^{いま}し給う光の世界から遠ざかること実に甚しく、

その距離は、地球からそれを取りまく宇宙の最外郭にいたる距離の三倍はあった。

更に三六〇行に

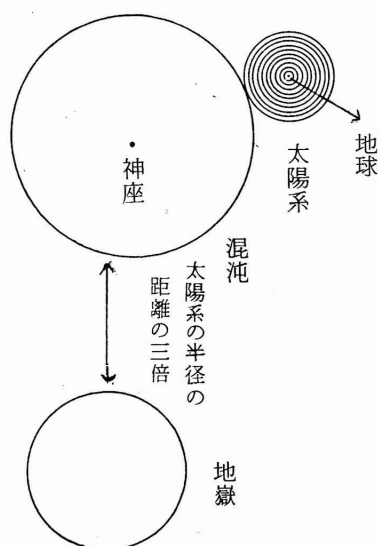
あそこは、彼の王国の僻遠の一角にあつて裸同然のまま放置され、

とか、或ひは八三二行に

……今頃はすでに巨大な
球体となっており、天の辺境に近い一角
に祝福の場所として

おかれているはずだ。……

それらの論を考え合はせると、地球は神の輝く円型世界の外辺に小さく付着した原子、小さな円い粒位なものである。(Ⅷ、一五―三八)、その地球を中心に向九つの同心円の軌道があり、中心から最外円までの距離の三倍の長さを神の座から測った地獄の世界の縁が来ていると考えられる。略図に描けば次の様にならう。埋窟から言う地球を廻る九重の円と神の国の円は重複してもかまわない。宇宙空間の明るい大気圏の様なものである。



この宇宙の構図の特徴は昔と違って地獄を地球ではなく神の世界の向う側の宇宙空間に置いたことである。このため従来の宇宙よりずっと拡大したことになる。従って神の座の位置が地球から遙かに遠離り、広くなってきたことになる。第八章でラファエルに対しアダムが天体についていろいろ訊ねるがどうも明瞭な答が得られない。科学的に正しい地動説と旧来の天道説が混合された矛盾である。そこは神が人間の判断にまかせておられるのである。新らしく湧き出する科学の力を妨げまいとされる神の配慮を示している。と言うよりはかつてイタリアでミルトンが出会った尊敬する科学者ガリレイに思ひを馳せ、地動説に加担した故をもって法皇から有罪とされて修道院に幽閉された教会の仕打ちに対する辨護である。それが奇しくもこの文を書いている日にローマ法皇ヨハネ・パウロ二世の演説により、「ガリレイ・ガリレイの学説は正しい。彼は天才的物理学者であり誠実な信仰者である」との発表がなされた。ガリレイはこれで破門が解かれ地獄からやっと釈放された。三百五十九年四月と九日ぶりのこと。このことから見ても十七世紀は如何に現代と同一の時代であるか判るであらう。それは理性が優先の時代であるが神はそれを人間にまかせて、より高い位置からじっと見そなはすと言ふのがミルトンの宇宙聖書説なのである。

for heaven

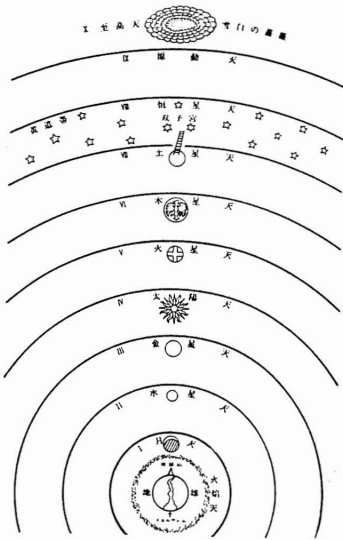
Is as the book of God before thee set,
Wherein to read his wondrous works, and
learn

His seasons, hours, or days, or months, or
years.
(III, 66-69)

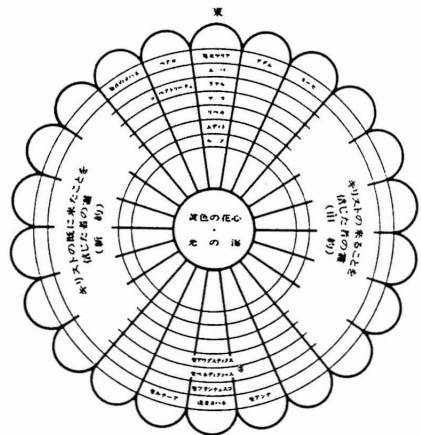
理解の便宜上ダンテの神曲に基く地獄極楽の構図を示
してみよう。こちらはブトレミー説に従っているので一
応矛盾はない。

地獄が地下にあるのが「失樂園」との違い。ミルトンも
天国の形は大体ダンテの天国と似た様に考えていた。た
だし範囲の広さと所在位置に違いがある。そのため地球

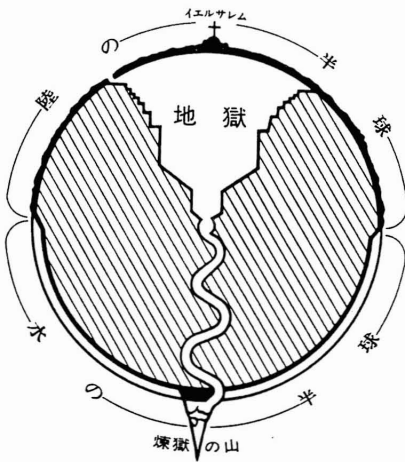
天国の概観

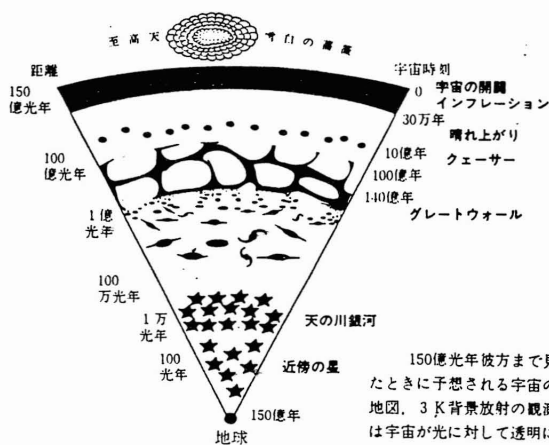


天国の薔薇



(ダンテ神曲、集英社、天国篇、地獄篇の図版)





より遠離ってしまった。所が二十世紀末のビッグバンモデル論から十年後の現在宇宙は更に新説を得ている。佐藤勝彦東大教授の「宇宙論は観測の時代へ」なる論文を図解と共に略説してみる。一五〇億年昔宇宙は熱い火の玉として生まれ、これが膨張冷却する中で銀河ができ、星ができ、只今の宇宙に至ったと言う理論がこの十年で更に進展し、これまで神業であった宇宙創生が物理学の法則から語れるようになった。それは天文学的観測によって宇宙開闢に可成り迫れると言う。

それは宇宙では遠い星を観測することは遠い過去を見ることであると言ふ考えから出発する。地球、太陽系、銀河系、そして他のアンドロメダ星雲の様な星雲を十個位まとめて局所銀河群と見る。それらがまた集まりより大きな銀河団を作る。それが集り超銀河団を構成するといふように宇宙は階層構造をもっている。超銀河団も互いに連なり蜂の巣のセル状に分布していることが十年程前に発見されている。特にこのセルの中の銀河の密集した濃い所が「グレイト・ウォール」(宇宙の万里の長城)と呼ばれ、三億光年位の所にある。ではどの位まで遠方、即ち昔まで遡れるかと言うと、それは宇宙がそこより先は不透明となる晴れ上がりの時刻までであると言うのだ。それが添付の宇宙図の説明である。とすると我々が現在認識できるのは一五〇億光年の距離、一五〇億年の昔までである。それは聖書の説に従えば神の座の位置がその外側に接し外から拡大宇宙を包む形となる。神はそこまで遠離れたことになり、ダンテの頃の宇宙よりはるかに拡大したと考えられよう。拡大させた人は物理学者である。彼らは神の祝福を受けるであろう。そして神はその中に含まれた地上のことはこの詩でも述べている如く人間にある程度委任されているのである。つまりその中の運用は良くも悪くも人間の責任なのである。神の座は遠くなった。従って多少の罪は犯しても神からは見えない

であらう。

所で知者の国、中国の聖者老子は既に春秋戦国の頃に人間の本质をよく見抜いていた。天網恢恢疎而不漏とはまことに至言である。天の神は人の行動が天の道と齟齬する時如何に冷酷無慈悲となるか、人は充分知っている筈である。林檎のお蔭で得た折角の智慧も人類末世に近くとその運用を誤ることが多すぎるように思はれる。

追記

「失楽園」の引用譯文は総て平井正穂氏の名文を使用させていただいた。引用部の數字はミルトンの原詩と一致している。